

國學院大學學術情報リポジトリ

『赤人集』 三系統の先後関係：
『萬葉集』 卷十抄本の変遷史

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池原, 陽斉, Ikehara, Akiyoshi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000108

『赤人集』三系統の先後関係

—『萬葉集』卷十抄本の変遷史—

池原陽斉

はじめに

『拾遺和歌集』以前、十世紀後半に成立したとみられる私家集『赤人集』は、『萬葉集』卷十の前半部（一八二～二〇九二）を、題詞・左注もふくめて、ほぼ排列どおりにならべた特異な歌集である。その伝本系統は、以下のように整理するのが一般的となっている^①。

第一類本 西本願寺本系 西本願寺本藏三十六人集「あか

人」三五四首

第二類本 正保版本歌仙歌集本系^② 書陵部藏（五一〇・一

二）「赤人集」二五一首

第三類本 陽明文庫本系 陽明文庫藏三十六人集（サ・六

八）「赤人集」二四一首

西本願寺本は天永三年（一一一二）以前に書写されたとおぼしく、現存する『赤人集』伝本のなかで、もつとも古い本である。一方、第二類本の最古写本・資経本の書写は十三世紀末^③、陽明文庫本は近世初期までくだる^⑤。この三系統には、複数の脱落箇所（一八九一～九九番相当歌など）の一致や、二首の萬葉

歌（一九六〇、六一）を一首にするといった共通項がある。三系統の祖本が同一であることを示唆する徴証といつてよく、この点に関しては、山崎節子の論証⁶⁾に疑問の余地はないだろう。

しかし、山崎が真名本・赤人集の潜在を想定し、三系統を、その真名本を個別に訓読した結果と推定する点に関しては、いささかの疑問がある。すでに別稿で指摘したとおり、『萬葉集』と対照すると、『赤人集』の三系統には、個別に訓読された結果とは考えにくい本文が複数存在しているからである（以下、赤人集歌の引用に際しては、西本願寺本を「西」、書陵部本を「書」、陽明文庫本を「陽」と略記する。また、傍線・傍点は稿者による）。

天漢 安川原 定而 神競者 磨待無（萬葉集・二〇三三）

あまのかはやすのかはらにさたまりて かゝるわかれば

とくとまたなん （西・二九七）

あまのかはやすのかはらにさたまりて かゝるわかれば

とくとまたなむ （書・一七七）

あまの河やすのかはらのさたまりて かゝるわかればと
くとまたなむ （陽・一九二）

春霞 流共尔 青柳之 枝喙持而 鶯鳴毛

（萬葉集・一八二二）

はるかすみわかれてともに あをやきのえたくひもちて
うくひすなきつ （西・一二四）

はるかすみわかれてともに あをやきの枝くひもちてう
くひすなきつ （書・七）

春かすみわかれてともに 青柳の枝くひもちて鶯なきつ
（陽・八）

萬葉歌の傍線部「神競者 磨」、「流共尔」に相当する箇所が、『赤人集』では三系統ともに、それぞれ「かゝるわかれば」、「わかれてともに」とある。いずれも漢字に即さぬ本文で、個別に訓読された結果とは見做しがたい。こういった例はほかにも数多く、三系統共通の祖本に仮名文が存したと考えないと説明に窮する。

稿者は以上の点をふまえ、附訓本卷十抄本が『赤人集』の原形ではないかと推定したことがあるが、その成否はともかく、三系統が真名本から、並列的に派生したと考えにくいことはたしかである。三系統の関係については再検討を必要としよう。そこで本稿では、とくに『萬葉集』卷十からの変遷という点に着目し、この問題を考察する。

なお、近時になって冷泉家時雨亭叢書から異本赤人集が紹介された。⁹⁾葉室光俊（真観）周辺で書写されたと推定される私家集群、いわゆる真観本の一本で、鎌倉中期の古写本である。卷十の前半部のうたが排されている点は従来の系統と同様であるが、歌数が一四五首と第二類本、第三類本よりも百首ほど少ない、卷十・一八四三番相当歌「昨日こそとしはくれしか」はるかすみかすかのやまにはやたちにつけり」（西・一四一、書・二四、陽・二七）からはじまる、他系統の伝本にみえないうた（『萬葉集』卷八・一四三三の類歌）¹¹⁾が存する等々、三系統のいずれにも属さない本文を持つ。『赤人集』伝本系統研究の再編をうながす内容を持つ本といつてよい。

しかし『萬葉集』卷十の側からみると、従来の三系統以上に脱落歌の多い伝本で、書写年代こそふるいものの、後発的な内容の本文ということになる。そのため、『萬葉集』卷十との関係を考えるうえでは俎上に載せにくい。すると、真観本に関しては別に論じる必要があるだろうから、本稿では従来の三系統の關係に對象をしほつて検討する。より具体的には、三系統の先後關係について、詞書や注記もふくめた本文的徵証を指摘し、その一端なりともあきらかにすることを目的とする。

一 書陵部本増補歌群の性格

それでは、『赤人集』三系統の關係はどのように考えることができるだろうか。まずは三系統それぞれの特徴と、この点に關する研究史を整理しておきたい。山崎が指摘するとおり、西本願寺・書陵部本と、陽明文庫のあいだには無視しえない相違があるので、まずはその点を確認する。

① 西本願寺本・書陵部本にある『萬葉集』の赤人歌四首（卷三・三二五、卷六・九一九、卷八・一四二四、二七番相当歌）が陽明文庫本にない。

② 『萬葉集』卷十と対照すると、西本願寺本・書陵部本は、卷頭近くをはじめ、六箇所にわたつて排列が乱れているが、陽明文庫本にはほとんど乱れがない。

この二点などを根拠に、山崎は西本願寺本と書陵部本がちかい關係にあり、陽明文庫本はやや距離を置く本と判斷する。基本的には追認すべき見解であろう。また、比較的ちかい關係にあると目される西本願寺本と書陵部本であるが、この二本にも以下のような相違のあることがすでに指摘されている。¹³⁾

③ 西本願寺本の冒頭から一一六番歌までは『大江千里集』の句題を削除した歌群で、一一七番歌以降が卷十相当歌となっている。

④ 書陵部本の卷末には、同本内部での重複歌六首をふくむ増補歌群十六首が排されている(二三六―五一番歌)。

どうして排列等の一致する二本に、このような相違が生じているのか。③についてはすでに別稿で私見を述べており、また、その詳細は「三系統の先後関係」を検証するという本稿の目的とも直接にはかわらないので割愛する。ここでは先行研究をふまえ、④について検討したい。書陵部本増補歌群十六首の採取元については、排列を根拠に藤田洋治が「陽明文庫本系」の『赤人集』ではなかったかと推定している。

この増補歌群は一体どのような赤人集から増補されたのか、全く不明ながら、西本願寺本系統にはこの十六首のうち七首しか見られず、万葉集から引用したとすると他の万葉集歌三十八首が欠落していることの説明が付かないことになる。しかし、この陽明A本(本稿の陽明文庫本と同じ――稿者注)のような系統を想定すれば矛盾なく解決する

ことになるのである。確かに、二五一番歌だけ排列を異にするが、他の十五首は陽明A本の排列通りに並んでいるのである。¹⁵⁾

藤田が述べるのとおり、陽明文庫本には書陵部本増補歌群がすべて存しており、排列もほぼ一致する。蓋然性のたかい推定といつてよいであろう。すると、現存伝本の書写年代こそ近世初期までくだるものの、「陽明文庫本系」の成立は書陵部本系の最古写本である資経本以前にさかのぼらせることができると思えてよい。

しかし「陽明文庫本系」の古態性は、そのまま現存の陽明文庫本の本文のふるさに直結するわけではないようだ。前掲藤田論文が具体例として提示する「花はさきみはならずとて」(陽・四一)と「はなはさきむめはちらねと」(書・二四一)をはじめ、「うちなひき春立ぬらしあおやきの」(陽・七)と「うちなひき春たちぬらしわかやとの」(書・二三八)、「梅の花我はちらさてあふみにて」(陽七七)と「さくら花われはちらさてあをによし」(書・二四四)など、陽明文庫本と書陵部本増補歌群には異同が少なくないからである。

既述のとおり「書陵部本系」の最古写本資経本は十三世紀末

に書写されているので、「陽明文庫本系」はそれ以前に存在していたと判断できる。この「陽明文庫本系」の本文は、現在の陽明文庫本とは大きく相違するはずであるから、同本に関して、本文と排列等の情報とを区別して捉えておく必要があるだろう。

二 西本願寺本の脱落歌

書陵部本増補部と対照すると、「陽明文庫本系」は資経本をさかのぼるが、陽明文庫本の本文に関してはそのかぎりではないということになる。つまり、「陽明文庫本系」は書写の過程で改変（誤写・意改など）されていたとおぼしいわけであるが、この本文の改変という現象は、同一の祖本を持つとみられる『赤人集』三系統の先後関係を考える場合に、看過しえない問題をはらんでいるようにおもふ。

というのも、現存最古写本である西本願寺本と『赤人集』の原形にあたる『萬葉集』¹⁷巻十を見合わせ、かつ他系統の本文とも比較してみると、西本願寺本の本文には古態をとどめていないと見做せる例が散見しているからである。

自古 擧而之服 不願 天河津尔 年序経去来
天漢 夜船滂而 雖明 将相等念夜 袖易受将冇

(二〇一九、二二〇)

むかしわかあけてころもをかへさねは あまのかはらにとしそへにける

天河よふねうかひてあけぬとも あはんとおもふたもとかへさむ
(書・一六三、六四)

右の赤人集歌は書陵部本を引用したが、陽明文庫本も小異こそあるものの、ほぼ同形で存している。訓読のありようを検討していけば問題は少なくないが、著しく萬葉歌の形を逸脱しているわけではない。一方、西本願寺本には大きな相違がある。

むかしあけてころもをかさねあまのかは あまのかはふねうかひあけぬとも
(西・二八六)

心えねはか、す

西本願寺本の上三句が二〇一九番歌の初句から四句に、下二句が二〇二〇番歌の上三句にほぼ相当することはあきらかで、本来は二首であったものを一首に誤認してしまっている。前者

の第四句と後者の初句にいずれも「あまのかは」とあることなどが誤認の理由と考えられるが、この誤認が原因となって、西本願寺本の前段階の『赤人集』に二〇二〇番歌下二句の残存部分がかなり不自然な姿で記載され、そのために西本願寺本書写者は「心えねはかゝす」と注記せざるをえなくなったのではないだろうか。

さらに、同本にはつぎのような例もある。

藤浪 咲春野尔 蔓葛 下夜之戀者 久雲在 (一九〇一)

ふちなみのさくのへことにはふくすの (西・一八四)

一年迹 七夕耳 相人之 戀毛不過者 夜深往久毛 一

云、不盡者 佐宵曾明尔来 (二〇三二)

つねにあかぬ (西・二九六)

前者は西本願寺本が下二句を缺く例、後者は原形すらほとんどとどめていないが、排列上は二〇三二番歌に対応している。とくに後者についてこのような奇妙な本文が生まれたのは、どのような理由によるのか。考えられる事態としては、書陵部本に「ひと、せになぬかのよしもあふ人の こひもあかねはよふけゆくかも」(一七六、陽明文庫本一九一もほぼ同文)とある

ので、その傍線部が部分的に改変され、「つねにあかぬ」としてのこった、というあたりだろうか。

なにぶん残存する文言が僅少であり、たしかなことは不明というほかないが、問題は、「つねにあかぬ」が西本願寺本に記載されているという事実である。和歌としてまったく解釈することのできないこの一文すらも書きとめた西本願寺本書写者に、「心えねはかゝす」と諦観された前掲二〇二〇番相当歌は、意味をとれる文ですらなかったということになろう。同本の本文の混乱を示唆する一例といってよい。

なお、卷十・一九〇一、二〇三二相当歌に缺落があるのは西本願寺本のみで、左記のとおり、書陵部本は全形をとどめている(陽明文庫本七二、一九一もほぼおなじ)。

ふちなみのさくのへことにはふくすの われかよはひはひとしくもあれ (書・六五)

ひと、せになぬかのよしもあふ人の こひもあかねはよふけゆくかも (書・一七六)

現存する伝本の書写年代を基準とすれば、西本願寺本から『千里集』部分をのぞき、増補歌群十六首を添加した本が書陵

部本であるとも考えることもできるわけだが、如上の例はその可能性を減殺させるといってよい。そして、一度このように捉えなおしてみると、西本願寺本には不審な本文が少なくないことに気付く。

三 長歌の改変

つぎの長反歌なども、『萬葉集』と西本願寺本の距離、また『赤人集』三系統の先後関係を考えるにあたつて格好の材料といつてよい。

夏雑歌

詠鳥

大夫之 出立向 故郷之 神名備山尔 明来者 柘之左枝
尔 暮去者 小松之若末尔 里人之 聞戀麻田 山彦乃

答響萬田 霍公鳥 都麻戀為良思 左夜中尔鳴

反歌

客尔為而 妻戀為良思 霍公鳥 神名備山尔 左夜深而鳴

なつのうたともをゑいす

(一九三七、三八)

ますらをのそてたちむかひ しめしの、かみなひ山にか
へりかた

たひにしてつまこひすらしほと、きす かひなひやまに
さよふけてなく (西・二一九、二二〇)

夏雑歌ともをゑいす

ますらをの いてたちむかふ しめのをに 神なひ山に
あけたては くは野さひたに ゆふされは こちしの
すゑに さすへまうひ えしさまなかるな

反歌

たひにいて、つまこひすらし郭公 神なひ山にさよふけ
てなく (書・一〇〇、〇一)

なつのさうの哥ともをゑいす

ますらおの いてたちむかふ しの、めの 神なひやま
に あけたては くはのさひたに ゆふされは かちの
しすゑに さすゑつまん うひすし さよなかなく

返哥

旅に出てまつこひすらし時鳥 神なひ山にさ夜中に鳴

(陽・一〇九、一〇)

まず目につくのは、『萬葉集』の長歌が西本願寺本で短歌に

改変されていることで、本文の相違も著しい。ただし後者の問題に関しては、その要因を推測することはさほど困難でない。

第二句「そてたちむかひ」は他本に「いてたちむかふ」とあり、これならば萬葉歌の「出立向」と対応するだけではなく、「そてたち」では歌意も不通であるから、「い(以)」から「そ(曾)」へ誤写された結果とみてよいだろう。

一方、第三句の「故郷之」を「しめしの、」とするのは不審であるが、書陵部本に「しめのをに」、陽明文庫本に「しの、めの」と小異のある歌句が存することを考慮すれば、現存伝本以前の本文をつたえている可能性がたかい。すると、このような本文が生成されたことには、なんらかの理由があると考えるべきだろう。ここで注目したいのは、小川靖彦が指摘する桂本萬葉集のつぎのような訓読の例である。¹⁸⁾

夏葛之 不絶使乃 不通有者 言下有如 念鶴鳴

(巻四・六四九)

たまかつら たえぬつかひの かやはねは こともある
こと おもほゆるかも

初句はあきらかに「なつくずの」と訓むべき表記であるが、

桂本は「たまかつら」とする。小川はこの例を「絶ゆ」にかかる枕詞として一般的な「玉葛」に意識したのであろう」と評しており、ときに文字に拘泥しない天曆古点の訓法のありようの一斑をしめすものと指摘する。

周知のとおり、天曆古点は村上天皇の勅により天曆五年(九五)にはじまった『萬葉集』の訓読事業(『禁制撰和歌所闢入文』『本朝文粹』巻十二)で、遅くとも同十年には終局したとみられるが、これにやや遅れて成立したとおぼしき『赤人集』にも以下のような例がある。

子等我手乎 卷向山丹 春去者 木葉凌而 霞霏霏

(一八一五)

とくかみをまきもくやまにはるされは このはるしきて
かすみたなひく (西・一二三)

鶯之 春成良思 春日山 霞棚引 夜目見侶 (二八四五)
あつさゆみはるになりぬらし かすがやまかすみたなひ
くよめにみれとも (西・一四三)

萬葉歌の初句を、それぞれ「とくかみを」、「あづさゆみ」と訓むことは不可能で、いずれも小川のいう「意識」に相当する

可能性がたかい。前者の「とくかみを」は歌語の類例を缺くが、「梳く髪を（巻く）」という意識で、枕詞として第二句「巻向山丹」の「巻」に冠したのであろう。

また、後者の「あづさゆみ（はる）」の結合は、『萬葉集』卷十・一八二九番歌「梓弓春山近く」以降、平安和歌まで無数の例が存するので、同様に解したとみてよい。『赤人集』の「訓読」には桂本（天曆古点）と同様の発想がみとめられる。

このうち、長歌の理解に即してとくに重要なのは、「梳く髪を（巻く）」という即興的な枕詞が『赤人集』に存することだろう。というのも、第四句の「かむなび山」は「神のいますところ」であるので、この神聖な山に標を張って占有するという意味で、「故郷之」を「しめしの、（標し野の）」という枕詞に改変したと考えることは、右のような例から推してさほど難しくないからである。この例も「意識」に相当しよう。

また、書陵部本の「しめのを」は「標の緒に」と解せるから、西本願寺本と同様に「神なび山」にむすびつけることは可能であろう。ただ、「しめのを」に神なび山に」と格助詞二で次句にかかるのは不審なので、この本文を生かす場合には、なんらかの誤写が句末にあったと考える必要がある。なお、陽明文庫本の「しの、めの（東雲の）」では「神なび山」との連想が

絶たれてしまうので、採用する必然を缺く。語形は類似しているので、他系統のような本文から誤られた可能性がたかい。

以上のように、西本願寺本の第四句までは、萬葉歌の本文から派生したものと推定できる。問題は結句「かへりかたく」で、あきらかに訓読された歌句ではない。ここで注目すべきは、『萬葉集』とほか二本に共通して存する「反歌」の二字を、西本願寺本だけが缺くという事実である。二二九番歌が短歌に改変されている以上、当然の措置ではあるのだが、ここは単なる題詞（詞書）の脱落と見做すべきではないとおもう。

というのも、この「反歌」が「かへりうた」と訓読され、それが歌句に取りこまれ、音数律の関係で「かへりうたく」となり、さらに「う」が「か」に誤られた²⁰——七音句への改変と誤写のいずれが先かは厳密にはわからず、順序は逆かもしれないが——と考えれば、この不思議な結句のありようは説明することが可能だからである。「反歌」を「かへりうた」と訓読する例が『赤人集』にあり（西・三五〇詞書）、題詞を訓読する例がほかにも多いことを考慮すれば、「かへりかたく」は偶然生まれた本文ではなく、「反歌」が誤認された結果とみてよいだろう。

当該長歌の成立事情を以上のように捉えることができる

れば、「反歌（返哥）」という詞書を有する書陵部本、陽明文庫本は書写年代の先行する西本願寺本よりもふりい体裁をとどめていると判断できる。このことは、書陵部本と陽明文庫本が長歌形式であることから裏づけられよう。また、三本ともに第三句「故郷之」を次句にかかる枕詞とする点も念頭におけば淵源は同一であり、とすれば、萬葉長歌が二本のように「訓読」され、それをさらに短歌形式に改変したものが西本願寺本と考えられるからである。⁽²³⁾

ひとたび短歌に改変されたものが長歌に回帰するとすれば、『萬葉集』を参照したと考えるほかないが、それにしては萬葉歌と歌詞の相違が著しすぎる。陽明文庫本を例にとれば、第六句「くはのさひたに」は本文との乖離が著しいが、第七句の「ゆふされは」までは萬葉歌にまず忠実といつてよい。

しかし、以降は結句以外ほとんど整合せず、句数すらあつていない。萬葉歌十六句に対して陽明文庫本が十一句、書陵部本が十句と『赤人集』伝本間でも異同があり、書写過程での混乱も少なくなかったであろうが、選定された本文とは考えにくく、短歌形式とする西本願寺本を後発的な本文と見做すべきであらう。

四 「詞書」の残存状況

ここまでは、西本願寺本のうた本文に関する問題を中心に指摘してきた。しかし、『萬葉集』や他系統との関係からみて、問題をかかえているのはうた本文だけではなく、詞書（題詞）や左注にも注意すべき点は少なくない。まずは巻十を基準として、三系統の標目・詞書・左注等（以下「詞書」と略記する）の残存状況を表示する。

巻十	陽	書	西	巻十	陽	書	西
1812 標目	×	×	×	1923 題詞	○	○	○
1818 左注	○	△	×	1924 題詞	×	○	○
1819 題詞	△	×	×	1925 題詞	○	○	○
1832 題詞	×	×	×	1926 題詞	○	○	○
1838 左注	×	○	○	1927 左注	○	○	○
1842 左注	○	○	○	1936-5 題詞	○	○	○
1843 題詞	○	○	○	1937 標目	○	○	○
1846 題詞	×	×	×	1937 題詞	○	○	○
1854 題詞	○	○	○	1938 題詞	○	○	×
1874 題詞	○	○	○	1938 左注	○	○	○
1877 題詞	○	○	○	1964 題詞	○	○	○
1878 題詞	×	×	×	1965 題詞	○	○	○
1879 題詞	×	×	×	1966 題詞	×	○	×
1880 題詞	○	○	○	1976 題詞	○	○	×
1884 題詞	○	○	○	1978 題詞	○	○	○
1886 題詞	○	○	×	1979 標目	○	○	×
1887 題詞	○	○	○	1979 題詞	○	○	×
1889 題詞	×	×	×	1982 題詞	○	○	○
1890 標目	×	○	○	1983 題詞	○	○	○
1896 左注	×	×	×	1987 題詞	○	○	○
1897 題詞	×	×	×	1994 題詞	○	×	×
1899 題詞	×	×	×	1995 題詞	×	×	○
1908 題詞	○	○	○	1996 標目	○	○	○
1909 題詞	○	○	○	1996 題詞	×	×	×
1915 題詞	○	○	○	2033 左注	×	×	×
1919 題詞	×	×	×	2090 題詞	○	○	○
1922 題詞	○	○	○				

「○」は「詞書」残存箇所、「×」は脱落箇所である。また、「一九三六・五題詞」は、『萬葉集』の脱落歌²⁴「はるかすみたなひくのへにわかひける つなはまをたえむとなとおもふな」(西・二二八、他二系統にも小異歌あり)に附された「詞書」で、便宜上こう呼称した。太字と「△」に関しては、三系統の残存状況とあわせて説明する。

それでは、『赤人集』各系統の残存数を確認すると、卷十の「詞書」五十三個に対して、陽明文庫本は三十五個をのこしている。このうち、一八一九番歌題詞の「△」は、以下のような例である。

卷十・右柿本朝臣人麻呂歌集出(二八一八左注)

詠鳥(一八一九題詞)

陽明・柿本の人丸うたをゑいす(六左注)

陽明文庫本「詞書」の前半は、あきらかに卷十・一八一八番歌左注であるが、後半の「をゑいす」は余分で、おそらく一八一九番歌題詞が混入し、「とり」が脱落したのだろう。二種の「詞書」を合体させてしまっている例はほかにもある。先述した長歌の「詞書」の例で、三系統ともにほぼ同様である。

卷十・夏雑歌(一九三七標目)

詠鳥(一九三七題詞)

赤人・なつのさうの哥ともゑいす(陽・一〇九詞書)／夏雑歌ともをゑいす(書・一〇〇詞書)／なつのうたともをゑいす(西・二一九詞書)

こちらは「とも」から「とり」への誤写(ないしは意改)の過程が明瞭である。「△」の例は、『赤人集』が「鳥」に相当する箇所を落とすため、やや不確実な例となつてしまっているが、同趣のケースとみられる。この二例は、三系統が同一祖本から派生したとする山崎説を補強する材料ともなるであろう。つぎに書陵部本であるが、三系統のなかでもっとも多くの三十九個の「詞書」をとどめている。ただし、一八一八番相当歌左注の「△」は増補部にあるので、これをのぞくと三十八個となる。

そして、最古写本である西本願寺本は三十二個と、書陵部本はもちろん、陽明文庫本とくらべても残存数が少ない。とくに注意すべきは、太字とした八箇所である。この八箇所は西本願寺のみ「詞書」がない、あるいは他二系統のどちらかには「詞

書」があるのに西本願寺本にないという部分である。以下に、二本に「詞書」のある五例を提示する。

A 懼逢（二八八六題詞）——あへるをよろこふ（陽・六五、書・五八詞書）

B 反歌（一九三八題詞）——返哥（陽・一一〇詞書）、反歌（書・一〇一詞書）

C 問答（一九七六題詞）——とひこたふ（陽・一四四）、とひうた（書・一三一詞書）

D 夏相聞（一九七九標目）／寄鳥（同題詞）——「なつあひき」とりによす」（陽・一四七詞書、書・一三八詞書）

Aは卷十の題詞をそのまま訓読した例、Dも標目と題詞が一体化しているが、文言はそのままである。Bは三節でとりあげた例で、「返」と「反」の異同があるが、「案ずるに、凡て此反歌をそふる事は、短歌は不能詠吟が故、短歌のおほよそをつめて三十一字に詠むなり。然れば返も故あり。……いはむや返反の音、調によりて不可改こゝろにある歟²⁶」という『興義抄』の記述をふまえれば、通用をみとめてよいだろう。

Cは書陵部本のみ相違する。陽明文庫本には問題がないの

で、書陵部本の誤写などを疑うべきであろう。少しあとの「譬喻歌」（一九七八題詞）をみると、書陵部本には「たとひうた」（二三七詞書）とあるのに、陽明文庫本は「とひ哥」（一四六題詞）、西本願寺本は「たひうた」（二五七詞書）と小異があり、この程度の誤写は起こりうる事がわかる。

また、卷十・二〇八九番歌は長歌だが、陽明文庫本・書陵部本の相当歌をみると、それぞれ「なか哥」（陽・二三九詞書）、「長歌」（書・二三〇詞書）という詞書が附されていることにも注目したい。卷十は長歌であっても「長歌」という題詞は附さないで、おそらく『赤人集』段階での挿入であろうが、陽明文庫本と書陵部本という、比較的距離のある伝本両方にみえるということは、三系統に分かれたる以前に附された詞書である可能性がたかい。西本願寺本はこの例も缺いており、脱落したとおぼしい。

つまり、西本願寺本は最古写本ではあるものの、本来あるべき「詞書」を、書写年代のくだる書陵部本や陽明文庫本よりも多く脱落させている。このような事態は、二本が西本願寺本以前のふるい内容を保持していることを示唆するのではないだろうか。

逆に、書陵部本や陽明文庫本が「詞書」を増補したと考える

ことも、理論的には可能であろうが、その場合、校勘資料は『萬葉集』ということになる。しかし、『萬葉集』を参照したとすると、「詞書」の増補はいかにも中途半端だし、脱落歌など、ほかにも見直すべき箇所はいくらもあったであろう。二本が西本願寺本をさかのぼる内容を保持していると考えの方が、蓋然性のたかい見方ではないだろうか。

おわりに

以上、西本願寺本と書陵部本・陽明文庫の本文を対比し、うたの改訂、「詞書」の残存状況という観点から、その先後関係をさぐってきた。本稿で問題とした長歌から短歌への変遷、「詞書」の脱落といった諸要素は、「書陵部本系」、「陽明文庫本系」が、西本願寺本以前にさかのぼりうることを示唆している。もともと書陵部本増補歌群と陽明文庫本の本文異同が示唆するように、書写がくりかえされるなかで、本文が改変されていく場合もある。その過程についてはまた別に検討する必要があるだろう。

しかし、それと同時に、この二系統が西本願寺本以前から存したであろうことも念頭におかねばなるまい。二系統のうち、

「詞書」の残存数からみれば、卷十の姿をよくとどめているのは書陵部本ということになるが、この系統は、先行研究に徴して一節で述べたとおり（第一節①・②）、排列や所収歌に関する問題がある。

その点、卷十の体裁をもっとよく保持しているのは陽明文庫本である。もちろん「詞書」の残存数が書陵部本を下回るといった本文上の難点はあるが、それは近世初期写の陽明文庫本の問題で、「陽明文庫本系」に敷衍する必要はあるまい。「陽明文庫本系」自体の古態性は顧慮されてよく、この系統が『赤人集』の嚆矢にあたる可能性は、十分に想定することができ。

また、卷十の前半部だけとはいえ、『赤人集』は『萬葉集』を訓読したごく初期の文献であるから、『萬葉集』の本文校訂にも利用できる可能性があることを、はやく佐竹昭広が指摘している。その指摘は現在でも有効性をうしなっていないが、校異に関する基本文献である『校本萬葉集』では最古写本であるためか、西本願寺のみが採用されている。

しかし、本稿の結論をふまえるならば、西本願寺本の本文はかならずしも最善とはいえず、他本も活用してこそ、十分な本文校訂が可能となるのではないだろうか。本来ならば校訂の実態を考察し、その有用性を指摘すべきであろうが、紙幅の余裕

もなく、本文校訂の具体相の検証に關しては他日を期すことにしたい。²⁸⁾

なお『赤人集』に關しては、本稿の論点とは別に、どうして卷十抄本に赤人の名が冠されることになったのかという成立に關する疑問をはじめ、未解決の問題が多くのごされている。同時期に成立したと推定される『人麿集』²⁹⁾や『家持集』³⁰⁾とも合わせて、平安時代における『萬葉集』の享受、萬葉歌の利用といった面から言及すべきことが少なくないのであるが、そこまでは踏みこむことができなかった。これらが今後の課題であることを確認し本稿を終える。大方のご批正を仰ぎたい。

注

- (1) 竹下豊「解題(赤人集)」、『新編私家集大成』日本文学学会図書館、藤田洋治「赤人集」、『和歌文学大辞典』日本文学学会図書館
- (2) 第二類本は書陵部蔵本の親本にあたる資經本「山辺集」が存するので、「資經本系統」と呼称する方が妥当ではあるが、前掲(1)竹下の分類にしたがう。
- (3) 久曾神昇「三十六人集」(塙書房・一九六〇)、新藤協三「三十六人集」、『和歌文学大辞典』
- (4) 小林一彦「資經」、『和歌文学大辞典』古典ライブラリー
- (5) 国文学研究資料館編『陽明文庫 王朝和歌集影』(勉誠出版・二〇一〇)
- (6) 山崎節子「陽明文庫(二〇・六八)「赤人」について」、『和歌文学研

- 究」第四十七号・一九八三)
- (7) 拙稿「平安時代中期における『萬葉集』伝来の様相——西本願寺本『赤人集』の形態を徴証として——」、『上代文学』第二一四号・二〇一五)では、多くの例をあげてこの点を確認している。
- (8) 前掲(7)
- (9) 『冷泉家時雨亭叢書』第九十一卷(朝日新聞社・二〇一五)
- (10) 田中登「三たび真観本私家集について」(前掲(9)所収)
- (11) 竹下「赤人集 唐草表紙本」(前掲(9)所収)
- (12) 前掲(6)
- (13) 山崎「赤人集考」、『國語國文』第四十五卷第九号)
- (14) 前掲(7)。同論では、平仮名別提調本の卷十抄本が、漢詩題と和歌を交互に排する『千里集』と外観が近似するため、合冊されたであろうと推定した。
- (15) 藤田「三十六人集の本文改訂試論——陽明文庫(サ・六八)本を中心に——」、『和歌 解釈のパラダイム』笠間書院・一九九六)
- (16) 前掲(15)
- (17) 『赤人集』が卷十の訓読の結果として生まれた歌集であることは、拙稿「萬葉集」伝来史上における『赤人集』の位置」、『古代中世文学論考』第三十集・新典社・二〇一四)、「仮名萬葉文献としてみた『赤人集』——『萬葉集』本文校訂の可能性をさぐる——」、『國語國文』第八十四卷第七号・二〇一五)で詳述した。新沢典子「赤人集と次点における万葉集卷十異伝の本文文化」、『上代文学』第二一四号・二〇一五)にも指摘がある。
- (18) 小川靖彦「天曆古点の詩法」、『萬葉学史の研究(第二刷)』おうふう・二〇〇八、初出一九九九)
- (19) 熊谷直春「秘閣における源順——後撰集と古点作業完成の時期——」、『平安朝前期文学史の研究』桜楓社・一九九二、初出一九七二)。山口博「後撰和歌集の成立」、『王朝歌壇の研究 村上・冷泉・円融朝篇』

櫻楓社・一九六七、初出一九六三）は、天曆七年（九五三）終局と下
限をさかのぼらせるが、ここでは十世紀中葉と特定できればよいの
で、これ以上は穿鑿しない。

(20) 『和歌&俳諧ライブラリー』（日本ミヅ図書館）での検索結果による。

(21) 菊地義裕「神奈備」（『上代文学研究事典』（おうふう・一九九六）

誤写ではなく、「帰る方々よ」（和歌大系）と解しての意改とも考えら
れるが、字体も近似しており、誤写とみるのが穏当であろう。

(22) どうして短歌形式とされたのかは不明だが、素寂本人麿集に「ナツノ
サウフラエイス／マスラノイデタチムカフシノ、メニカミナヒヤマ
ニ」（六八六）とあるのは注意すべきであろう。詞書が『赤人集』と

同様に『萬葉集』の標目と題詞を合体させた形となっており、第三句
が「シノ、メニ」とされ、しかも短歌形式だから西本願寺本との親近
性は疑えない。肝心の結句を缺くこともあり、先後関係は特定しがた
いが、一方がもう一方に依拠した可能性はたかいであろう。

(24) 脱落歌に関する先行研究等については、前掲〔17〕拙稿『萬葉集』
伝来史上における『赤人集』の位置に詳述した。

(25) 『奥義抄』での「短歌」は現在の「長歌」を指す。この呼称が『古今
集』の影響をこうむることは、浅田徹「長歌」（『和歌文学大辞典』）
に肝要な説明がある。

(26) 『日本歌学大系』第一巻（風間書房・一九五六）

(27) 佐竹昭広「萬葉集本文批判の二方法」（『萬葉集抜書』岩波現代文庫・
二〇〇〇、初出一九五二）

(28) 工藤力男「孤字と孤語——萬葉集本文批評の一視点——」（『萬葉集校
注拾遺』笠間書院・二〇〇八、初出一九八八）

(29) 本文校訂の成果に関する一端は、前掲〔17〕拙稿「仮名萬葉文献とし
てみた『赤人集』」に示した。

(30) 藤田「人麿集」（『和歌文学大辞典』）

(31) 鐵野昌弘「家持集と万葉歌」（『こ』とが拓く 古代文学史）笠間書

院・一九九九）は、『家持集』はほか二集よりもやや成立が遅れると
推定している。『拾遺集』や『古今和歌六帖』との関係もふくめて、
萬葉歌人の名を冠した三集の成立に関してはなお検討すべき問題が多
いが、ここでは指摘するにとどめる。